



キヴォトス・アンダーグラウンド

K	<u>ivotos</u>
D	<u>ramatic</u>
III	<u>Kinema</u>

キヴォトス・アンダーグラウンド

Kivotos
Dramatic
III **K**inema
キヴォトス・アンダーグラウンド

Index

- 【起】 伊草ハルカ 襲撃 P005
- 【承】 鬼方カヨコ 搜索 P030
- 【転】 浅黄ムツキ 合流 P056
- 【結】 陸八魔アル 矜持 P087
- 【幕】 便利屋 68
アウトローはかく語りき P129

【起】 伊草ハルカ 襲撃

【起】伊草ハルカ 襲撃

【モモトーク】

《ハルカ》せ、先生

《先生》《ハルカ》？

どうしたのこんな時間に？

《ハルカ》あ、あの

《先生》《うん》？

《ハルカ》わ、私、どうしたらいいのか

《先生》《うん、とりあえず落ち着いて

何があったのか話して

《ハルカ》アル様が

《先生》《アル？ アルに何かあったの？

《ハルカ》《行方不明に

《先生》《すぐ行くよ！

先生が事務所付近に到着したとき、周辺は住民や騒ぎを聞きつけた野次馬たちによって大混乱の有様でした。

『ハルカ！』

「せ、先生。すいません、こんな時間に」

『大丈夫だよ。それよりもアルが行方不明ってどういうこと？』

「えっと、とりあえずはこちらへ——」

まさか先生もここまでの騒ぎになっているとは想像していなかったようで、冷静さを欠いている様子。

ここはひとまず、落ち着いて話しをするべきだと判断しました。

『これは——』

私たちは喧騒から身を隠すようにソコを訪れました。

いえ、正しくは戻ってきたと言う方が正しいのかもしれませんが。

『ハルカ、一体何があったの？』

場所は私たち、便利屋68の事務所。

だった場所。

窓ガラスは砕け散り、部屋の壁には銃痕が乱れ咲き、革張りのソファはボロボロに。

部屋、事務所と呼ぶには余りにも無惨な場所でした。

「こんな感じになってはしまいましたけど、その、外よりはマシかと思えますので」

申し訳程度に私と先生が座れる場所を確保して、私も腰を下ろします。

吹き抜けの窓の向こうからは状況を邪推する声がザワザワと聞こえてきますが、外よりは幾分かはマシでしょう。

「えっと、何があつたかというお話なんですけど」

「うん……」

「正しくは私も分かりませんが」

分かっていることは一つだけ。

「アル様が襲撃されました」

「ッ——！」

それは他でもないこの部屋の惨状が証明してくれていました。

私の説明がなくとも、先生も状況は理解して頂けた様子。

「それで、アルは？」

「現状では……」

分かっているのはその行方が分からないということだけ。

「でも、無事だということは確か、です」

方法は秘密というか、なんというか……

「本当に？ アルは大丈夫なの？」

先生があまりにもアル様を心配するので、ついつい私も口を滑らせてしまいます。

「はい。えっと、その、たまたま」

「たまたま——？」

「そう、たまたまアル様にGPSを付けてまして……」

「うん……なるほど？」

「はい——」

とりあえずその理由は置いといて。

というか、断固として触れずにおいてください。お願いします。

「えっと、それでカヨコとムツキは？」

「お二人は今、最後にアル様の消息が確認できていた場所を確認しに。それほど遠くはありませんので、そろそろ連絡が来る頃かと思えます。先生、ここに来るまで道中騒がしくありませんでしたか？」

「そういえば……」

先生も思い当たる節はある模様。

話が早くて助かります。

「その中心がまさにアル様の姿が最後に確認できた場所になります」

その時、タイミング良く携帯に着信が入ります。

「あ、ハルカ？ 先生は来た？」

「は、はい。丁度今、簡単に経緯を伝えていたところ、です」

『こんばんは、カヨコ。それでどういうことなのかな？』

「えっと、何から説明したら良いかな。とりあえずこれ見てもらった方が早いかな。ハルカ、ビデオ通話に切り替えてくれる？」

「は、はい」

私は急いで通話をビデオ通話に切り替えます。

「あ、先生だ。ヤッホー」

『こんばんは、ムツキ』

「ごめんね先生。アルちゃんがまた迷惑かけちゃって」

『大丈夫。気にしないで』

「えへへ、ありがと」

お二人の声と周囲から届く喧騒。

まだソコには大量の野次馬が押し掛けていているようでした。

『それで今はどういう状況なの？』

「ああ、うん。えっとそのどう説明したらいいか。とりあえず見てもらった方が早いかな」

そして、映像はスライドして、件の場所を移します。

中心部を囲うような人、人、人。

その全てがこの状況を一目見ようと集まった野次馬たちです。

その縁を取り囲むように、ヴァルキューレの学生がキープアウトと書かれたテープを張り

巡らせて、それ以上の侵入を防いでいました。

『えっと、一体何があったの？』

「まあ、そうなるよね……」

先生の反応はもつともでした。

だって、その中心にはビル一棟丸々がすっぽり収まってしまいうらいのとてつもない大きさの穴が空いていたのですから。

「見た感じ、周囲もいつ崩れてもおかしくない感じかな」

「とりあえずヴァルキューレの人たちがこうやって警戒網を敷いたから二次被害は出てないっぽいね」

『アルは？』

「周囲を探してみたけど、見つからなかったよ」

「携帯も繋がらないの。電波が届くところにいないみたい」

『頼みの綱はハルカがつけたGPSだけか』

「そういうことになる、かな」

『うん、分かった。とりあえず二人ともこっちに帰ってきてくれるかな？ とりあえずこれからどうするか相談しよう』

先生の提案に応じて、ボロボロになった事務所に私たちは集まりました。

『とりあえずなんでアルが襲撃されたの？』

「それは私たちにもさっぱり……」

昨晩、私たちはたまたまアル様を事務所に残して、近くのコンビニエンスストアに買い物に出掛けていたのです。

本当にたまたま。

お風呂上がりにはアイスクリームを食べたくなったという理由で。

「アル様は何でも良いからって、私たち三人で好きなもの買ってきなさいって」

そして、戻ってきた時には既に事務所はこの有様だったのです。

窓ガラスは割れ、ドアは吹き飛ばされていました。

ただならぬ事態が起きたのは明白です。

もちろん、私たちは直ぐに周辺の捜索を行いました。

タイミングが噛み合ったのは奇跡でした。

たまたま、本当にたまたま。

私はアル様のコートのGPSを付けていました。

その、アル様とたまに別行動するのが、寂しかったので。

試験的にちょっと試していたのです。

アル様がどこにいるのか直ぐに分かるように。

おかげでアル様がどこにいるのかは直ぐに分かりました。

幸いにも場所はそれほど遠くありません。

私がナビゲート、お二人がアル様の元に向かいました。

到着するまで数分。

どれだけ遅く見積もったとしても五分も掛からなかったはずですよ。

『うん？ ちょっと待って』

『あ、はい——』

この経緯を話している途中で先生が割って入ってきました。

『とりあえず、アルが一人で事務所に行った時に襲撃を受けたんだよね？』

『はい』

『で、そこから逃げたアルをハルカがたまたま付けてたGPSを頼りに、カヨコとムツキで

追いかけた』

『その通りです』

『今の話聞いているだけだと、ちゃんと問題なく助けられてたようなの？』

『えっと……』

ドラマ的な展開だったら、きっとそうだったのです。

『ごめんなさい。ごめんなさい』

全ては私が悪いのです。

『えっと、まさか？』

「すいません。すいません」

どうやら先生は何が起こったのか察してくれた様子でした。

それでも促され、私は徒然と結果をお伝えするしかありません。

誤算があったとすれば一点。

GPSには超小型の高性能マイクが搭載されていました。

そのため、当然ながら私の耳には襲われるアル様の音声がしっかりと届いていました。

どれだけアル様が強くとも。

数というのは立派な戦力足りえるのです。

追い込まれるアル様の苦しむ声が私の耳を叩きました。

その時、アル様がいたのが件の大穴のポイントでした。

ほんの少し。

あとほんの少しだけ、私が我慢できていれば良かったのです。

でも、耐えられませんでした。

衝動的に。

私は押ししまいました。

ポチり、と。

丁度、そのポイント一帯に仕掛けていた爆弾のスイッチを――

『……………あゝ』

「ただ、アル様を助けたくて」

『うん、うん』

「とりあえず落ち着いて、ハルカちゃん」

「ハルカの爆弾はいつものことだし」

『まあ、そうだね……』

「本当にすいません。私のせいでアル様が……」

『とりあえず状況は分かったよ。流石に爆発した結果、あそこにあんな大穴ができるとは思わなかったと……』

「まあ、そんなところ」

「本当、アルちゃんって面白いよねえ」

「うーん、まあ、確かに？ アルっぽいかな」

「うう……」

まさに穴があつたら入りたい心境でした。

アル様の代わりに私が落ちれば良かったのに。

『とはいえ、本当にアルは大穴に落ちていったの？ 実際に誰かが見たわけじゃないんですよ？ もしかしたら肝心のGPSだけが取れて、落ちていったかもしれないし』

「それについては今私たちが調べてきたよ」

「周辺の建物にあった監視カメラの映像とかチェックしてみたけど、アルちゃんが爆発に巻

き込まれて落ちちゃったのは間違いないみたい。ハルカちゃんのGPSが拾った音声データもあるし」

『今のアルの様子は分からないの？』

『はい。音声を受信するには距離が遠すぎるみたいで、電波が届かないんです』

GPS機能がまだ生きているだけでもラッキーなレベルです。

とはいえ、現在地は落下後から全く動いていない状態。

おそらく、既にアル様から外れてしまっている可能性が高いです。

『真相は穴の底ってことだね』

『そういうこと』

『流石にこうなっちゃうと迎えに行つてあげないとねえ』

『まあ、行かないわけにはいかないよね』

『ただ、問題が一つありまして……』

『問題？』

『はい——』

そう、アル様の救出をするためには避けては通れない大きな問題が一つ。

『どうやってあの中に飛び込むのかっていうのがね……』

『なるほど……』

ここまで騒ぎが大きくなっている以上、おそらく夜になっても野次馬は残るはず。

加えて周辺にも影響が出る可能性は否定できない以上、周辺をヴァルキューレが警護するのはほぼ間違いない、穴の底に向かうための入り口が一箇所しかないため、私たちはどうかしてあの警備網を抜けなければなりません。

「強行突破するにしても、できれば弾薬は温存しておきたいよね」

下がどうなっているか分からない以上、できれば万全の状況で飛び込みたいのが本音です。「無駄な体力は使わずに行きたいよねえ」

いざ戦うとなるともちろん、突破することは難しくはないでしょう。

とはいえ、無傷というわけにはいかないのも確かです。

「うん、確かにそうだよね」

「どうしよう、先生？」

「うゝん、そうだなあ」

私たちの今の装備では無傷で潜り抜けるのはかなり難しい。

頼みの綱は先生だけなのです。

「具体的に何か希望はある？」

「いつそのこともう一回ハルカちゃんの爆弾で全部吹き飛ばしちゃおう？」

「それは止めて……私も色々怒られるから……」

「ふふ、冗談だよ、先生」

爆弾は良い案だと思おうのですが、先生に止められると仕方ありません。

「それこそ煙幕とか？」

「小麦粉でもばら撒けば良いでしょうか？」

「それだと爆発しちゃうからね！」

一石二鳥だと思つたのですが、ダメでした。

「でも、煙幕は良いんじゃないかな？ 一番楽な方法だと思ふなあ」

「うん、そうだね」

煙幕に紛れて大穴に飛び込むのは最適解な気がします。

「私も賛成です」

「確かにそれなら後でバレても怒られるくらいで済みそうだよね」

「怒られるのは前提なんだ」

「まあ、その大人の責任としてね……」

何だか先生の背中が辛そうです。

「でもまあ、うん。多分何とかかなと思う。その辺は私に任せて」

「本当？ 流石先生！」

「助かる」

「お、お願いします！」

「うん、任せて。じゃあみんなはとりあえず出発の準備をお願いね」

「はい！」

それから数時間後。

時刻は日付が変わり、すっかり夜にキヴォトスが染まった頃。

「……」

シュコー。

『みんな準備は良い？』

シュコー。

「……」

私たちは今、間違いなくこのキヴォトスで誰よりも怪しい格好をしていました。

『みんな大丈夫？』

「えっと……」

「先生、この格好は一体……」

現場は間違いなく厳戒態勢。

深夜の時間帯でも大穴周辺はヴァルクューレが不眠不休で警戒を続けている状態です。

彼女たちに見つかれば、不審者認定されるのはまず間違いありません。

『うん、ちょっと知り合いにお願いして借りてきたんだ』

「ガスマスクを、借りる——？」

そう、私たちは今頭に仰々しいガスマスクを付けて、遠目から様子を伺っているのです。

私が言うのもなんですが、その見た目はそれはもう怪しくて仕方ありません。

シュコー、シュコーと漏れる空気音が常にする辺り、密閉性は抜群。

「でも、先生よくこんなの借りれたよねえ。これ結構良いヤツなんじゃないのお？」

「た、確かに」

少し調べてみましたが、軍用品レベルの装備でした。

「こんなの普通に生活してたらキヴォトスで使う機会なんてまずないレベルだよ？」

『まあ、私もそう思うけど……』

何でもダメもとで聞いてみたら「任せて、ちょうど良いのがある」と、ノリノリでこれが出てきたとのこと。

一体、どんな知り合いなのでしょうか……

「とりあえずその話は置いて。みんな具合はどう？ 特に息が苦しいとかはないかな？」

「うん、大丈夫」

「私も特に問題ないよ！」

「わ、私もです」

シュコー、シュコーとなる音が少し、いえ、凄く気にはなりますが、機能上問題は全くありません。

むしろ、ない時よりも空気が美味しい気さえします。

「一応、清浄フィルター機能が付いてるらしいけど、やっぱりなんか息しやすい気がするよ

ね……」

「どうやら気のせいではなかったようです。」

『ハルカ、お願いしてたのは大丈夫だった？』

「あ、はい。大丈夫です。準備は万全です。多分」

「私も一緒に着いて行っただけど、バッチリだったよ！ ああいうのはやっぱりハルカちゃんに任せておけば完璧だね」

「あ、ありがとうございます」

私たちと別れてから数時間後、先生は大きなボストンバックを担いで戻ってきました。

中には数日は余裕を持って過ごせそうな日持ちする食料と今私たちが付けているいかついフォルムのガスマスク。そして、いくつかの小さな箱型の装置。

最初は爆弾かとも思ったのですが、それにしても作りが少し頑丈過ぎる様子。

これでは火力が周辺に拡散しません。

「でも、先生これって爆弾じゃないの？」

『うん。できれば穏便に済ませたいしね……』

確かに爆弾で周辺を攪乱するにはリスクが高過ぎます。

大穴が更に拡大する可能性も否定できませんし、万が一失敗でもしようなものなら、警戒レベルは更が上がってしまうでしょう。

流石は先生です。

『カヨコ、頼んでたことは調べておいてくれた？』

「うん、確認しといたよ。先生の言ってた通り、警備はちゃんとローテーションが組まれた。大体二時間ペースで交代してるみたいだね」

『ありがとう。助かるよ』

「それに見た感じ、日付前くらいから人数は少し減ってるよ。昼間の二割減くらいかな」

『うん、了解。じゃあ今が大体ちょうどいいくらいかな』

先生が確認したのは時計。

聞いた話では今がちょうど警備が交代してから一時間が経った頃合いです。

「先生、何で今が一番ちょうど良いの？」

『人間、長時間集中するのって意外と難しいんだよね』

先生曰く、私たちくらいの年齢の人間が集中できるのはせいぜい一時間程度くらいらしいです。

それ以降になるとどうしても集中が切れてきたりする人が増えてくるのだとか。

『だから授業も一時間単位で区切られてるんだよ』

「へえ、なるほど」

「先生が先生っぽい」

『いや、うん。先生だからね！』

しかし、確かに先生の言うとおり、これまでは真面目に警戒にあたっていたヴァルキュー

レ生たちも徐々に気が緩んできたのか、私語が増えていたり、姿勢が乱れたりと落ち着きが見られなくなってきました。

『うん。そろそろ行こうか。みんな準備は良い？』

『うん』

『いつでもオッケーだよ』

『はい、私も大丈夫です』

先生が用意してくれたご飯も食べたし、仮眠も交代で取りました。

準備は万端です。

『じゃあハルカ。お願い』

『は、はい』

私は先生から事前に渡されていたスイッチを取り出します。

『先頭はカヨコ。次に私で、その後ろからムツキとハルカね。ハグれないように気をつけて』

先生に渡されたロープを全員で持ちながら、流れを最終確認。

『じゃあ、いきます！』

そして私は思い切りボタンを押しました。

『行こう！』

その瞬間、先生の号令と共に私たちは建物の裏側を縫うように走り出しました。

最初は何も起こってないのに？と、疑問を覚えました。その数秒後、事態は動き出し

した。

ゴッ——！

派手な爆音が一体に響き渡り、閃光が広がりました。

一瞬にして昼間のような喧騒が大穴を中心に広がっていきます。
加えて――

「襲撃！ 襲撃――！」

「ゲホ！ 本部にえんぐゴホゴホ――！」

視界を埋め尽くすこれでもかと言わんばかりの煙幕。

「すごい！ 先生、何これ――！」

「視界を防いで、少し警備を妨害できるような煙幕をね！」

周囲から聞こえてくる悲鳴の中を私たちは快適かつ順調に駆け抜けていきます。

『流石に私もこんなことになるとは思ってなかったけど』

周囲の声を聞く限り、強力な催涙ガスのようです。

煙の中には混乱と悲鳴、地獄のような雄叫びが響き渡っていました。

「先生、なんか凄いことになってるみたいだけど……」

「先生、大丈夫――？」

『大丈夫な、はず。何だけど……何だか心配になってきた……』
先生の想定とはどうやら少し違うようです。

しかし、目的の大穴まではお陰様でスムーズに到着できそうでした。

時折、ヴァルキューレの生徒数名と遭遇することはありましたが、こちらは高性能ガスマスクのおかげで全員が万全の状態。

対する向こうは視界に加えて、催涙ガスのせいでもともと動くのすら難しいレベルです。そのおかげもあり、制圧するのは非常に容易でした。

「全員、ストップ」

私たちは難なく大穴の淵まで辿り着きました。

「改めて見ると深そうだねえ」

「底が見えないね……」

周囲の喧騒を吸い込むような大穴が目の前に広がっていました。

「ちゃんと準備しておいて良かったです」

テレビのニュースでその深さが底知れないのは分かっていたのですが、改めて眼前に広がる暗がりには想像以上の不気味さを感じます。

「それじゃあみんな、準備は良い？」

「うん」

「いつでもオッケーだよ」

「は、はい！」

それでも私たちの決意は揺るぎません。

アル様はこの奥底できっと私たちを待っているはずですよ。

「『『セーのー』』」

勢いをつけて、私たちは一斉に大穴へと飛び込みました。

全身を包み込む浮遊感と下から突き上げるような上昇気流。

しかし、それを全て無視して、私たちの体は下へ下へと落ちていきます。

『うああああああああああああああああ——』

一応これでも便利屋として活動してきたので、これくらいの事態を想定した訓練は受けてきています。

しかし、先生はそうではありません。

忘れていましたが、先生は非戦闘員なのです。

「アハハ、先生の顔おもしろーい！」

「ムツキ、先生も必死だから。あんまり茶化さないの」

「クフフ、先生頑張っつー」

訓練済みの私たちと違い、先生はこういう体験も初めてでしょう。

一般人に訓練なしで、いきなりスカイダイビングをしろと言っているようなモノですよ。先生の心情を考えれば、体裁など保つ余裕はないでしょう。

「ハルカ、下の様子はどうか？」

「あ、はい——」

呼ばれ、私はガスマスクを外し、代わりに暗視スコープを装着して沈みゆく暗闇の奥を覗き見ます。

「だ、大丈夫です！ 問題ありません！」

「了解。それじゃあみんな号令に合わせて。3——」

「2——」

「1——！」

タイミングを合わせて一斉にバックパックの肩紐から垂れる細い紐を勢いよく引きます。

ガバツ——！

大きな破裂音と共に、体が重力に逆らうようにグッと上に引っ張られます。

『ウツ——』

「先生、大丈夫——？」

「な、何とか……」

ゆらゆらと体が揺られる感覚。

私たちはゆっくと下へと落ちていました。

暗闇に大きく広がる円は合計四つ。

緊急脱出などに使われる一人用のパラシュートです。

『し、死ぬかと思った……』

「ブラックマーケットで仕入れた商品だったけど、使えて良かったよ」

「本当だねー。アルちゃんがこういうのもいつか必要になるかもしれないじゃない！って言うたから買っておいたけど、まさか本当に使う日が来るなんてねえ」

「そ、備えあれば憂いなしですね」

「問題はその肝心の本人がここにいないくて、そのせいで使うハメになったってことだけだね！」

ゆらゆらと揺れながら軽口を叩くくらいには余裕のある時間でした。

先生も落ち着きを取り戻したようで、下の様子を伺うくらいの余裕は出てきた様子。

『ハルカ、下の様子はどう？』

「まだ、今のところは何も——」

パラシュートを使っているとはいえ、私たちはもう数分は落下し続けている状態です。にもかかわらず、大穴の底はまだ見えてきません。

「相当な深さだね」

「アルちゃん大丈夫かなあ」

『アルのことだし、なんだかんだで大丈夫そうだけどね』

不安の種を上げだすとキリがありません。

残念ながらアル様に付けたGPSには生体反応を確認できる機能は備わっていません。

それでも、アル様がこの大穴に落下して以降、その反応は少しばかり移動を繰り返しているのは間違いありません。

可能性としては十分なはずですよ。

「あ——」

その時、暗視スコープに僅かな反応が映りました。

「ハルカ？」

「どうしたのハルカちゃん？」

「し、下が見えました！で、でも、これは！」

これは——

「か、川ですよ！」

「え——！！」

『えええええええええええええええええッ！』

T o b e c o n t i n u e d